第６回　小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

○開催日時　平成 27 年 12 月 24 日（木）　午後１時半～
○開催場所　研修室
○出 席 者　塩田町長、後藤教育長、熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員
○同 席 者　【町職員】
松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長
後藤子育ち共育課長、高橋教育指導室長
【教育関係者】
岩澤小豆島高等学校校長、小玉小豆島中学校校長、片山池田小学校校長
羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、川井苗羽小学校校長
安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）
川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）
中多小豆島こどもセンター園長、増田小豆島こどもセンター所長、
大岡内海保育所所長、慈氏草壁保育園園長
○傍 聴 者　２４名
○事 務 局　４名

【内　　容】

[塩田町長]　挨拶
第 6 回の小豆島町総合教育会議を開きます。今日は前回に引き続きまして町民の皆様から教育についてのご意見をお聴きする会にしたいと思う。今日は 7 人の方から意見をお話ししてもらう。働いている場所も年齢も様々な方の意義あるお話を聞けると思う。ちなみに小豆島高校の杉吉先生は遅れて 14 時ごろになると伺っている。では順番にお話を伺います。最初に山本先生は内海病院の小児科科長ですが、発表の後すぐ病院に帰られるので最初に山本さんからお願いする。

[山本　真由美氏：子どもたちの健康について]　挨拶
平成 24 年度から生活習慣病予防健診というものが香川県全域でスタートしているが、それについて説明させていただきたいと思う。香川県は糖尿病の有病率が高いというのはご存じの通りだと思うが、子どものころからの正しい生活習慣を身につけることや、家庭や地域ぐるみで生活習慣病に取り組むということを目的にして平成 24 年度から開始された。小豆島町も同様である。
お示ししているのが昨年度の小学校 4 年生のデータ、肥満傾向のお子さんが 1 割程度いた。やせ傾向のお子さんが 2%前後いるということだけ挙げさせていただいた。大体 3 年間経過しましたが、そんなに大きな変化はないかと思う。ただこれは短期間の取り組みで

変わるものではないですし、本人とか保護者とか学校はすごく考えていただいているので、そこだけが頑張ればいいというものではなくて、これも広い意味では地域の大人や、これから親になる人たちも含めて、学校に行ってからの取り組みだけではもちろんダメですし、就業前の取り組みだけではダメ、成人教育ではないですけど、親になる前であったり、親になってすぐであったり、という段階からの介入が必要ではないか。親だけでなく祖父母とか地域の子どもにかかわる大人たちも含めて、意識を高めるというのが、子どものモデルになる必要があるのかなと感じる。

また、やせ傾向のお子さんが 2%前後いるということにも対応が必要と感じていて、基本的には体質的なものが多いと思いますけど、中には拒食症のお子さんがいらっしゃったりとか、ほかの病気で体重減少をきたしているお子さんがいらっしゃったりとかがある。肥満じゃないからオッケーというわけでは決してなくて、標準体重なんだけどだんだん痩せていっている、体重が落ちていっているという体重変化の大きいお子さんについてはやっぱり注意が必要で、そういうことを考えると子どもたちが健康的に成長していくことを考えると、ワンポイントの生活習慣病予防健診だけでは一概にひっくるめてということは難しい。アプローチの仕方にしても、学校の養護の先生や担任の先生が一生懸命個別に声をかけてくれたり、家庭に働きかけてくれたりしていただいているのですが、やっぱり「このままじゃだめだからね」というようなアプローチではされてない。自己肯定感を下げないように上手に持っていくような必要がありまして、そういう姿勢を医療側としてもサポートしていきたい。

短期間で結果の出るものではない。学校だけが頑張ればいいものではない。家庭だけが頑張ればいいものではない。本当に地域ぐるみで取り組んでいかなければならない。生活習慣病予防健診、これは本当に就学前から、たとえば子どもを妊娠しましたという段階から、そういう地域の大人の教育というものができればいいなと思う。

次に食物アレルギーへの対応の現状について、説明させていただきたいと思う。そこにお示ししているのが、平成 25 年度に日本が候補見解で調査した結果になります。小中高で大体 4，5%のお子さんは食物アレルギーがあるという状態で学校に在籍されている。これは香川県での調査でも同様であり、それに対しての学校給食の対応についてですが、小豆島町の給食のアレルギー対応というものは、とても丁寧で、ここまで対応してくださっているのは県内でも本当に珍しく、ほぼほぼない。ありがたいと思うし、ぜひこの体制を維持していってもらいたい。

ただ、アレルギーがあるとわかっているお子さんに対しての対応は除去や代替食で対応してもらっているが、これまでアレルギーがないとされていたお子さんが急に発症するということもありますので、今、教育委員会が協力して学校現場の先生に緊急時の対応についての研修会を毎年行っている。これは先生方やアレルギーを持っている子を担当しているという先生だけではなく、それこそ一部の事務職の方とか学校現場の全職員を含めてぜひとも学校におられる方々が、何かあった時に動けるように、対応できるように、準備しておくというのが必要だと思うので、継続していきたい。

次に特別支援教育についても説明させていただきたいと思う。発達障害は数も多いですし、いろいろお話にも出るかと思いますが、私たち医療の側が密に関わることのある、重度の障害をもつお子さんについて話をさせていただきたい。数は少ないのですが、やはり小豆島の中にも何人か重度の障害を抱えて、高松とか本来であったら特別支援学校に行っ

て教育を受けた方がその子のためにも良いのではないかと思われるお子さんや地域的に介護の難しい、地域の学校に進学して特別支援教室で教育を受けていらっしゃるお子さんもいる。なので学校に負担が大きいとは思うが、そういうお子さんは島の中で大きくなっていかなければならないし、島の中で友達と過ごしていくことが大事な経験だと思う。なのでその子たちは貴重な経験をさせてもらっているのではないかと思う。

支援学校があればそこにと言われるが、支援学校がないけど地域の子どもたちと一緒に育っていける。それはメリットのひとつであると考える。支援学校の設立について動きがでてきているが、いいことだとは思うが、隔離にだけはならないようにしていただきたい。支援学校があるからそっちに行って、すべてお任せではなく、地域の中で育っていく子どもですので、支援学校に行けば全部おしまいというわけではなく、地域の中で育てていただきたい。支援教育や就労支援を含めた存在になっていただきたい。

発達障害に限らずいろんな問題は、特別支援教育や医療から見た特別支援教室その他学校教育につきましては問題がありますが、ひとつひとつ話し合っていけるシステム、風通しがだんだんできてきているのではないかと思う。特に園の先生方とはいろんな話をさせてもらっている。学校側ともお互いに時間的余裕がなかったりしており、もっと先生方のお話を聞きたいし、こちら側の話をお伝えしたいところもたくさんある。一つ一つクリアして、子どもたちが育つように協力していけたらと思う。

[塩田町長]

ありがとうございました。教育委員の方から、特に質問があるなら、お願いする。

[後藤教育長]

アレルギー対応についていつもありがとうございます。アレルギー対応についてすべての先生ができるようになればいいと思うが、いい方法がないかお聞かせください。

[山本氏]

基本的には各学校が集まって吸収する。それを受けた先生が持って帰って、やっていただくのが一番早いかと思う。その回数を一年に一回とかではなく、学期に一回など定期的に回数を重ねていただいたほうがいいのではないかと思う。年に一回でも悪いわけではないが、定期的な再確認が必要であると思う。

[岡田委員]

最近アナフィラキシーなど急に発症すると聞いているが、急に発症した場合の対応の仕方、救急車を呼ぶなど、命にかかわることもあるので、どうなっているのか。

[山本氏]

今緊急時の対応について学校の先生に集まっていただいて、実際にこういったケースがあるとか、シミュレーションしたりだとかしているが、基本的には、まず人を集める。あとは、緊急を要する症状だとかいくつか上げられるので、それに応じてひとつでも当てはまれば救急車を呼ぶこと。そしてこういうような対応をしてくださいというような、緊急対応を作成していて、各学校の子どもがいるような教室であるとか、子どもが使うところ

においてもらうようにしている。すぐ見られるようにして、すぐにこれはやばいと思ったら、この通りにしたらいいと一目で誰でも分かるようなシートを、これは県ので作成したが、これを去年各学校に配り、設置していただいている。それプラス研修をして学校の先生にはしていただいている。学校の先生方には研修を重ねてもらい、困ったら見ていただけるシートを作成している。基本的にはその通りにしていただいたら、対応できるようになっている。

[塩田町長]
　内海病院が来年の３月で閉めて、４月から小豆島中央病院になるが、小児科医療がどう変わるか。また、先生は沖縄の出身ですが、沖縄と小豆島の子育てや教育の違い・特色を一言でお願いします。

[山本氏]
　まず４月以降の小児科の医療体制ですが、今内海病院の常勤２人体制となっているところを、４月からは３人常勤の体制を取れるようになる。なので今私がこうして外に出れば院内に一人になり、本当の緊急時に手が足りなく、一回は乳幼児健診で出かけているところを、危ない人がいるからと呼び戻されていった、ということもあったが、おそらく院内に２人いれば手が足りるので、緊急時への対応は手厚くなるのかなと思う。距離は遠くなるが、現状今できていることから、できなくなるようなことはない。
　沖縄の子育てについて、私は高校卒業して出てきたので分からないが、近所の人が子どもをつれている人に声をかけてくれたり、助けてくれたり、というところは島と似ているところがあるのではないかと感じる。

[塩田町長]
　３人のお子さんを持つお母さんとしては、小豆島の子育てや教育にどういった意見があるか。

[山本氏]
　私も旦那もほぼ家におらず、帰ったら寝ているとか、起こしたらご飯食べさせてすぐ出るという生活をしている。そういった意味では学校の先生のほうが子どものことを良く見てくださる。一昨日の懇談会で様子を聞いて、子どもの様子を親以上に見てくれていて、すごくありがたいと思う。

[塩田町長]
　それでは山本先生は病院に戻られます。ありがとうございました。
　これからは６人の方から順番に発表していただいて、まとめて質疑をしていただきたいと思う。

[内田　洵子氏：幼児期に大切にしたいこと、自然体験から得るもの]　挨拶
　「海と山のしましまようちえん」は、自然の中で子どもを伸び伸びと遊ばせたいという親たちが集まって始めた自主保育活動。当初は０～３歳の子供が親と集い、週に５日ほど

山や海で遊んでいた。子供たちが成長するに従い、活動日を増やし、保育資格を持つ母が主となり、預かりあいの形になったのが、昨年度から。現在は週に４日、９時半から１４時まで活動している。今年度からは肥土山の「美水くらぶ」さんの活動に参加し、子供たちと一年を通してお米作りに携わり、地元の人たちとの交流を少しずつ広げている。

私たちのような活動は、「森のようちえん」として全国で急速に広がっている。「森のようちえん」は 1945 年にデンマークの一人の母親が始めた。わが子を自然の中で育てたいという思いから始まったこの運動は、育児に関わる人々に共感を得て、ドイツや北欧を中心に国境を越えて広がりました。日本では、2005 年に第一回の「森のようちえん全国フォーラム」が開かれ、今年で 11 回目を迎えた。自然に恵まれた鳥取県では、今年度から「森のようちえん」に町制度が、長野県でも信州型自然保育認定制度がはじまり、三重県でもそうした動きが始まっている。教育的な効果だけでなく、地域づくりの面でも各自治体が注目している。

多くの「森のようちえん」がそうであるように「しましまようちえんは」決まった園舎を持っていない。月曜日は肥土山へ、火曜日は西村の遍路道へ、というようにその季節にあった場所で活動している。始まりと終わりの集いで話を聞く場面があるが、それ以外では、子供たちが主体となって自由に遊ぶ。幼児期は、大人になっても揺らがない心の根っこを育てる大切な時期。幼児期の子供にとって遊びは学びである。限られていない時間の中で、山や海や里山で仲間とともにたっぷり遊ぶこと、遊びこむことの時間を保証することが何より大切であると日々の取り組みから感じる。自然の中には水や木、草花、虫といった子どもたちの感性を刺激するものがたくさんある。それらに働きかけ、それらすべてを遊び道具として、遊びを展開していく子どもたちの想像力や感性には目を見張るものがある。

レイチェル･カーソンの『センス･オブ･ワンダー』には「知ることは感じることの半分も重要ではない」という有名な言葉があるが、まさに自然の中は感じることの宝庫であると感じる。自分から心を動かす経験をどれだけできるか、その経験は小学校や中学校に上がってからの学びの要素に必ずつながっていくと思う。自然の中は自分の思い通りにはならない。良い天気の日もあれば、急に風が強くなって雨が降りだすこともある。平坦な道ばかりではなく、でこぼこしていたり、急斜面もある。そんな思うようにいかない自然の中に身をおいて様々な経験をしていく中で、子供は自然や他人と折り合いをつける力やたくましい体や心を育てていけるのではないか。小豆島には恵まれた自然環境がある。私のように都会から地方へ移り住む人々、特に子育て世代が求めているのは、この豊かな自然であると思う。これを子育てや地域の活性に使わない手はない。

一枚目と二枚目の資料は長崎で行われた今年の全国交流フォーラムのもの。小学校で 30 年以上先生をされていた方の話であった。退職されて子どもたちの「育ち」に危機感を感じ、0～5 歳の「育ち」が重要だと気づいたという話をされながらこの資料を見た。二枚目「子ども時代の原風景に自然遊びを」というところは私たちの考えと同じということで参考資料とする。三枚目からの資料は『ようこそ森のようちえんへ』という本があり、自然の中でのびのび遊ぶことの保障は森のうちではないとできないことではなくて、既存の幼稚園や保育園でもできるのではないかと思い、持ってきた。

あらゆる垣根を越えて、大切な幼児期にかかわる人々が子どもの育ちにとって大切なのは何かを考えていければよいと思う。来年の 1 月 11 日にサンオリーブ大ホールでしまし

まようちえんが主催する柴田愛子さんの講演会がある。テーマは「子どもの気持に添ってみましょう　子どもは自ら育つ力を持っています」。横浜で保育施設「りんごの木」の代表をされている柴田愛子さんは大人が子どもをどう育てたいかではなく、子ども自身がどう育ちたいかということに着目し、子どもの心に寄り添う保育をモットーに長年活動をされている。私は実際「りんごの木」に行き、子どもがこんなに本音を出して生き生きと過ごしていることに驚いた。私たち大人は何を教えたり与えたりできるのか考えたりするのではなくて、ありのままの子どもたちを受け止めて手助けすることが必要ではないか。ＮＨＫ　Ｅテレ「すくすく子育て」にも特集され、全国で講演会に引っ張りだこの柴田愛子さん。保育や教育にかかわる方や子育て中の方これから子どもを育てる方など、あらゆる方に聞いていただきたい。

最後に一人の母親として感じること。小学生の子どもを持つお母さんから、「宿題が多すぎて遊ぶ暇がない」と聞く。自分の子ども時代を振り返ってみると、宿題ができなくて遊べなかったということはなく、放課後の楽しい遊びが頭をよぎる。勉強ももちろん大事だが、小学生になっても、まだまだ遊びは学びだと思う。遊びの中から人との関わりやコミュニケーション能力を育てていけるのだと思う。また家庭の中でお手伝いをするなど、普段の時間も成長するうえで大切だと思う。ぜひ家庭学習の限りを考えていただきたい。

［森川　光与氏：青い目が見る日本の教育］　挨拶

私は青い目ではないが、住んでいたところが欧米系のところが多く、向こうの教育を見てきた。欧米の方が見ると日本の教育はこう感じるという点と、欧米の友人との会話の中で、日本の教育の問題点、変わったらいいと思う点を挙げる。３つの提案は私自身が３年前に海外から帰ってきたのですが、実際に子どもたちが通っている学校を見て感じた３点である。ここは比較的簡単に変化、改良ができるのではないかと思った点を挙げた。

一つ目、宿題や授業内容の対応ですが、先ほど内田さんもおっしゃったが、母親として見て確かに宿題が多いと感じる。ニュージーランドの小学校は９時に行って１５時には学校が終わる。１５時からはクラブ活動が始まる。うちの子供は学校は８時～１６時くらいだが、実際は７時過ぎにでて、音楽部に所属しているので学校にいる時間が長い。帰ってきてから１７時半から疲れた体で帰ってきて、宿題をやらなければならない罪悪感を感じながら、だらだらと過ごす。ご飯を食べて、疲れているのでＴＶを見ようとするが宿題があるからできない。そのままだらだら夜を過ごすというのが、現状としてかなり多い。切り替えが上手にできる子であればよいが、うちの子はだらだらと過ごしてしまう。私も母親として宿題をやりなさいと怒ってしまう。そういった悪循環が続いているのが月～金。夏休みや春休みでも、休みだから子どもらしく遊べるかと思っても、山のような宿題が出てくる。いとこの大阪の子の宿題と比較しても、こちらの宿題は量が多いと感じる。島で一番感じているのは、水泳や秋のお祭りなど素晴らしい力を入れるべき行事があるが、その時期に関しても宿題の量が減ることは少なく、対応がない。そうすると子どもたちに無理を強いて２３時２４時まで勉強をしてへとへとの体でお祭りの練習に次の日行くとか、そういうことが実際に起きていることを他のお母さん方からも聞くし、私も子どもたちも、いくら何でもやりすぎかなと感じている。なので柔軟にイベントがあるから少なくするとかの対応をしていただけたら、子どもたちも切り替えができるようになるのではないかと思う。

２つ目はペーパーレスな、教員・親・子ども間の連絡の取りやすいシステムの構築ですが、海外での学校のシステムを考えたときに、日本での子どもたちが持って帰ってくる連絡のお手紙の量が非常に多い。うちの子どもが５年と６年生がいるので、全く同じ紙を二重に持って帰ってくる。それは広告の場合もあるし、学校からの大切なお知らせであることもある。うちの子は一人はまじめで一人はふざけているので、一人が持って帰らなかったときに、確実に兄からもらえるという利点はあるが、学校全体、島全体、日本全体でこれをやっている場合に、無駄になる紙の量は莫大になると思う。向こうでは学校からの便りも、クラスの親との対応も、ほぼＥメールとネット。インターネットではなくてイントラネットと言って学校内と先生だけがアクセスできるパスワード付のネットで連絡をしている。なので、もちろん情報は提示するが、それをしっかりと見るかどうかは、親の方にゆだねられていて、親がそれをチェックするのには責任があるという形で進めている。持って帰って来る紙の量というのは最低限である。日本では今はもうほとんどの人がスマホやらを持っているので、どうしてもないという人だけ紙で配布するような対応で紙の量を減らすことで、環境にも良いこと、先生方の効率化を図れるのではないか。

３つ目、先生と話していると、私と同じくらいの子どもを持っている。先生は身を粉にして私の子どものために頑張っていてくれているが、自分の子どもたちのためには授業参観に出られない、子どもたちの大事な行事に参加できない、というのが現実にあると感じた。先生方の想いを私たちの子どもにかけてくれるのはありがたいが、先生方の自分の子どもにかける時間あって、先生もリフレッシュしてこそクラスの方に生かしていけるのではないかと考える。そういったフレキシブルな対応をしていければ、先生も効率の良い授業をできるのではないか。先生方はそうは思ってはいないかもしれないが、いつも夜７時８時まで職員室の電気がついているのを見てそう感じている。

これ以外に、ヨーロッパやカナダの友人と話しているときに、出てくる話題。日本に十何年在住している方や、日本で小学校中学校でＡＬＴなどを経験した方々との話である。まず日本では生徒が声をあげてもよいと感じられる環境がないという風に言われ、私も感じている。先生がどうですかと授業参観で聞かれ、子どもたちは手を挙げるが、ある程度決まった答えがすでにあるということは皆さんも感じるところで、子どももそれを読み取って答えている。でも自分が本当に思うところを答えてもいいという環境がなかなか日本の教育の中では少ないのかなと感じる。

今日本では英語教育に力を入れており、オリンピックに向けて英語が喋れる人が増えればいいと期待されている。現実英語は教科として取り上げはするが、英語は語学であって、ツールであるので、科目として勉強するものではないと思う。小豆島町では海外の先生が来て英語を教えてくださっているが、それ以外に英語をツールとして使う。たとえば休憩時間に海外の方が遊びに来ていて、その中で英語が出てくるとか、あるいは中国語が出てくるとか、語学がツールとして使われる場面が増えたらいいのではないかと話に出る。

最後に、世界の事情に触れる環境というのがない。世界で何が起きているのか、日本は日本の中で確立していて、外の世界で何が起こっていても、テロが起こっていてもあまり関係ない、とは言わないものの、まるで何もなかったように、日本の中が平和であればそれで終わっているねと言われる。世界の事情に触れる、ニュースに触れる、具体的にはネットで情報を調べて集めるというのは、決まったカリキュラムの中で取り入れるのは難しいが、世界にも子どもと同じような年代の子がいて、その子たちが危険を冒しながら学校

に行って勉強しているということに触れる機会があってもいいのではないかと思う。

［矢田　徹氏：伝統文化の継承について］　挨拶

まず昨年、塩田町長に中山の歌舞伎に出演していただき、大変好評をいただいた。島内はもちろん、島外からも声をいただき、ありがたく思う。町村合併以前の池田町時代から続けているが、本音を言うと続けるのが難しくなってきている。資料を見て説明させていただくが、中山の農村歌舞伎の始まりだが、小豆島は芸が少なく１７００年の初めに大阪の上方歌舞伎が入ってきた。最初は土庄の方へ、そして福田の方へと広がっている記録がある。中山の農村歌舞伎の舞台は２００年程前のもので日本最古のものであり、文化財になっている。現在問題になっているのが、なかなか役者が少ないということ。テレビが始まる前は非常に多かったが、テレビが始まるとご家庭でいろいろなものが見られるようになる。わざわざ舞台まで行って隣のおじさんやお兄ちゃんのやるお芝居を見なくとも、いつでも家庭で見られるような条件に変わってきた。なかなか歌舞伎に見物客もそうだが、出演者も減っていった。

ところが最近、田舎が都会の皆さんから注目されるような時代になってきている。その中で農村歌舞伎もみなさんから好評をいただくようになってきている。これまでは中山の地内で歌舞伎をやっていたが、たまに島内でやっても、島外に出て歌舞伎をやることはなかった。昭和５０年に中山にでご歌舞伎というものがあるが、これは全国でも非常に珍しいということで国立演劇場の方からぜひ演じてほしいと要望があり、行った。その後一切行うことはなかったが、島内の文化財の関係の方々から、小豆島の人々が知らないことを国立劇場でやっても仕方がないというご意見をいただき、行うことになった。星ヶ城のお芝居があり、プロが大正２年から東京の歌舞伎座や大阪、京都などで行っていたが、７回ほどやり、大正の終わりにぷっつりと終わってしまった。それについても、星ヶ城のお祭りの２００年祭にぜひやってほしいと会長から要望があった。それが平成１８年のことで、好評を頂けたので、それから何度もやっている。平成１６年１０月４日に天皇皇后両陛下がお越しになり、歌舞伎と中山の棚田をご覧いただいた。１７年２月５日、６日に東京のＮＨＫホールからの要請で演じてきた。最近では昨年の６月の１５日に東京小豆島会からの要請で明治神宮への奉納公演を行った。東京は初めてであったが、大変喜んでいただき、出演した我々も満足であった。

こういったように毎年行ってきているが、最近子どもが少なくなっている。私も昭和５２年から子ども会の会長を仰せ仕って３８年ほどやってきたが、昭和４８年から子ども芸が続いている。この中で私が感じることは、天皇皇后両陛下がお越しになった時に、ずいぶん練習をし、１５分間の演目でしたが、前日リハーサルを行った後、これだけ頑張れば天皇皇后両陛下に見ていただいても恥ずかしくない、大丈夫だということで、本番を迎えた。天皇皇后両陛下の横で私もじっと見ていたが、涙が出てきた。素晴らしい演技ができた。だから子どもたちに練習をしっかりやり、ほめ言葉も十分かけてやった。そのおかげで子どもたちものびのびとできたのではないかと思う。

子どもたちは年々減っていって、中山の子どもは１０名少々になってしまった。私が小学生の時には１５０名ほどいたのが、１０分の１以下。だから中山の子どもたちで演じるのは難しくなってきた。私が最近感じるのは小豆島町内の皆さんに声をかけて出演していただく、子どもたちにもそういった体験をしてもらうこともいいのではないかと思ってい

る。最近、島外に出た人が帰ってきて、子どもたちに歌舞伎を教えている。自分もやったことがあるので非常に取りつきやすいようで、お願いをしている。舞台の方も昭和６２年に国指定の重要有形文化財になっており、歌舞伎は香川県の無形民俗文化財になっている。ところが最近島外の動きもあって、歌舞伎が国の無形文化財としていただけるような状況になってきている。現在肥土山と中山の２か所だけになっており、この二つが小豆島の農村歌舞伎となっているが、これが国指定の無形文化財になれば、小豆島のＰＲにもなるのではないかと考えている。今は中山と肥土山の資料を集めており、文化庁に提出するようになっている。私はこの歌舞伎に７０年以上携わってきたが、出会ったころと最近では大きく変わってきている。継続していくことが非常に難しいけれども、しかし続けていくことが島のためにも良いのではないかと考える。

［柴崎　博行氏：町内の企業・産業等で求められる理系学部卒業者について］　挨拶

ご存じの通り小豆島の基幹産業は食品産業であり、企業の中でも醤油企業は大手数社、佃煮関係の加工食品企業は９件以上の会社では、研究室や品質管理室を持っている。そこで働いている人の多くは専門職であり、理系の学部を出られた方が多い。最近では若い人で県外の出身者が増えてきている。事情は様々だが、中には移住者の方が積極的に企業に勤めることもあるが、島内で求人しても人が来ないので、島外に新卒採用を募集しているケースをよく聞く。これはいいとか悪いとかではなく、島外の人を入れて成功している会社もある。しかし島外出身者は離職率が高いと思う。

私自身、大学２、３年の時に地元にそういった産業の企業があると初めて気づいて、そういった分野に進学していたため、今の会社に勤めた。もしかすると地元の中学高校生はこう言った企業があるとは知っているが、こういった仕事があることを知らないのではないか。１０年近く前、一度中学校でいろんな職種の方を集めたお仕事の説明会に参加し、説明をした。非常にいいことだと思うが、個人的には中学生に対してはタイミングが早すぎるのではないかと思う。

私見だが、職種に対して望まれる学歴を資料にまとめた。学生がリアルに感じていただけるのは、高校の１年の後半か２年の前半が進学を考えるので、一番参考になる時期ではないかと考える。島に帰って来いという話ではなく、こういった選択肢もあるということを、学生に示して、こういう道をたどればこういったゴールもあるというプロセスを示すことができたら、大学進学する前に自分で考えることができたら、進学先として考えてくれる人も出てくるのではないかと思う。

食品製造業のほかに化粧品製造業、つまりオリーブ産業で化粧品を製造しているところが何社かあり、そういったところは薬学部を求めている。電気関係、具体的には中国電気保安協会に勤められている方から話を聞くと、今小豆島にある出張所の中で一番若い方が６０歳、中国地方に出られている一番若い方は５０歳と、若い方が入ってこない。事業所としては島出身者がほしいが、工学部に進学するとトレンドとしてシステムや電子の関係に行きたがり、電機や土木のような基盤産業に行く方がいないというのが実態である。

私の会社は正規社員が７名で、島の人は２名、私が若くて４０歳。定年まで全うしてもあと十数年で島の人間はいなくなるということ。県の機関としては島の人間がいなくても支障はないが、働く方としては島の人間がいた方がありがたい。ただここに書いてあるような方面に進学する方がいないので、後継者を作ろうとしてもままならないのではない状

況がある。そういった企業だけでなく、私の職場も人材集めに苦労している。今後も小豆島の基幹産業や食品産業、オリーブ産業などを伸ばしていく中で、必要なのは人材である。教育現場でも意識して、何かしらの手立てをしていただきたいと考える。

［岡田　樹一郎氏：地場産業を元気にする、教育現場からの情報発信！］　挨拶

今小豆島の地場産業は一部を除き苦戦を強いられている。小豆島の佃煮屋さんも苦戦している。私の考える原因として、ものが高騰していることがあげられる。小豆島は輸入品に頼っているため打撃が大きい。また考えられる原因としては、佃煮は塩分が多いこと、ご飯食からパン食へと食生活が変化したことがあげられる。また醤油は調味料などの変化により最初から味付けしてあるものなどが増え、使う機会が少なくなってきていることが減少の要因ではないだろうか。

しかし反対にオリーブ業界はＩターンＵターン含め、新戦力が数多く流入し活躍している。その要因は、健康ブームであり、注目が高まっている。またオリーブ産業は第一次産業のイメージが非常に強く、農業に従事したい方の参入もあるのではないだろうか。

ほかの業界も指をくわえて見てばかりは居られない。実はオリーブ業界は急に伸びたのではなく、地道に情報発信を行っていた。インターネットで見て行ってみようと思う人も多く、地道な情報発信は実を結ぶのではないか。

また自治体もしくは、教育の場を通じて小豆島のレアでリアルでディープな情報発信を行うのがベターであると考える。島の出身者はバラバラになっても、どこかの学校に所属していたため、学校に強い興味を持っている。たとえば野球など、地元出身者に知らない人はいない。そうしたスポーツや役場などの公式な情報以外のこともぜひ知ってほしい。北海道の地元の名産を知るときなど、実際のお客様の声を聞いて判断する。その時に大切なのが、良い声だけでなく、悪い声、情報もあれば、信ぴょう性も高まる。私の知り合いに９０歳以上の方がいるが、その方もネットを使って情報を得ていると聞いて驚いた。現在インターネットというものは不可避な存在であると感じている。

情報発信、具体的に何するのかというと、フェイスブックというものがある。私の学校でも持っているが、２０件、３０件と知りたい情報がすぐに入ってくる。島においてもこういった求人があるということに対して、それならどこのだれがいる、というように情報がすぐに入ってくる。また地方の学校の情報を港の掲示板に出しているところがある。そういった掲示板が多いといい学校である。職業説明会については、中学生では早いと私も考える。また説明会を何度も行うことで、生徒としても徐々に本音が見え、言えるようになるのではないか。即効性は決してないが地道に効いてきて、地方出身者はＵターンするときに就職活動をするが、地元に帰ろうか、都会に残ろうかという選択肢を一度は考える。その時に地元の情報があまりなく、そのまま向こうに就職することが大半であると思う。実際私も地元の企業を２，３社受けたがぴんと来なかったのが正直な感想で、向こうに約１１年生活していた記憶がある。なのでぜひ地元の情報を得られる環境をネットでも交流会でもいいので出していただけたら、小豆島に新しい人材が来たり、Ｉターンの人も小豆島に興味を持っていただけるのではないかと考える。簡単に言うと、刷り込みである。すぐには効かないがだんだん効いてくる、こういった刷り込みを教育の場を通じて行えたらなと思う。

最後に、企業は人に尽きると思う。ぜひとも優秀な人材を小豆島に集めるためにも、地

元の人とつながる場をこういう機会に持っていただければなと思う。

［杉吉　勇輝氏：小豆島高校野球部の取り組み］　挨拶

今日は小豆島高校の取り組みとして話をさせていただきたい。まず、この秋の大会で皆様のご声援がありまして、なんとか秋の大会で優勝することができた。また四国大会が徳島県で行われまして、阿南という山奥で暴風が吹き荒れる中試合したが、そこにもたくさんの方が応援に来てくださり、力になった。力及ばず負けてしまいまして、悔しい思いをしたが、本当にありがとうございました。

小豆島高校野球部での取り組みとして３つ紹介し、より小豆島高校野球部を好きになっていただきたいと思う。まず最初に一つ目は、ボトムアップ。ボトムアップの反対はトップダウンで、監督がメニューを決めてこれをやれ、君はこうしなさいというもの。選手たちがものを考えて監督にこういうことをやりましょうとか、部長にこんなことをしたいんですけどというように、意見を吸い上げていくのがボトムアップである。昨年の秋の大会では初戦で負けたが、今の高校３年生が高校２年生の時であったが、試合が終わった後に「自信がないんです」と泣いた。この状況を何とかしなければならないと考えたときに、どうやったら自信が持てるんだろうと考えて、ここにたどり着いた。

実際に練習メニューを考えさせたりとか、去年のチームではスタメンを考えさせたりとか、戦術を考えさせてサインも出させたりだとか、いろんなことをした。自分たちで考えて動いてやって、成功したり失敗することで、なんで失敗したんだろうとか、どうやったら次うまくいくんだろうとか、自分たちで考えるようになって、前向きに取り組める生徒が増えた。その結果、去年のチームは夏の大会で一つ勝つことができて、高松商業に負けたが、自信をつけていった。その財産が、今のチームに残っているのではないだろうか。

二つ目は徹底した未来志向である。時間の流れを考えると、過去の自分があって、今があって、未来がある。過去の自分が数学ができなくて、今もできなくて、未来もできないんだろうなと、考えていくと思うが、逆のことも考えられると思う。桃太郎で川上から桃が流れてきて、自分の前を通り過ぎて行って、川下に流れていくように、この会議もあと一時間もすれば終わり、明日には過去の話になっていると考えたら、時間は未来からやってくると考えられる。なので自分は未来にどうしたいかということを生徒にイメージさせて、それに向かって取り組むということを徹底した。なぜなら過去に自信を求めてしまうと、絶対に自信が持てない。勝っていないから。小学校中学校で県大会で何勝という話では甲子園にはたどり着かない。過去に勝ったから、今も勝てるではなくて、未来にこうしたいから自分たちはこうしていくということで自信を持っていけるようにと、取り組んできた。

具体的にはイメージインタビューといって、未来の試合、公式戦の勝った後のインタビューを今する、ということをやった。たとえば秋の大会の決勝戦、高松商業との試合前に選手同士にインタビューさせたが、ピッチャー長谷川に「長谷川君おめでとうございます」「ありがとうございます」「今日のピッチングどうでしたか」「いやあ、高松商業のバッターは振れていたんですが、夏の大会は慎重に行き過ぎてやられましたから、大胆に思い切って真ん中になげました。タイミングを外すことだけを意識しました。」みたいなことを話した。実際にその通りになって、秋の大会勝ったが、本当に全く同じインタビューをＮＨＫのアナウンサーが言っていた。「今日のピッチングどうでしたか」「いやあ、きわどい

ところを投げずに、真ん中投げました。緩急だけつけました」と言っていた。自信を持ってやれたのだと感じた。こんな風に、未来から物事を考えられるようになって、グラウンドに立った結果、いい結果につながったのだと考えている。

最後に三つ目、これは今年からではないが、私が就任した７年前にちょうど小高ジュニアという、地域の小学生や中学生と高校生がスポーツに取り組みましょう、という学校行事が始まった。野球だけでなく、陸上とかバスケットとかサッカーとかいろんな種目でやっているが、野球も継続して７年間やっている。初めて小高ジュニアをやった一期生が７年を経て現在高校３年生、教える立場になっている。彼らがまた小学生に野球を教える、教えられた子どもたちがまた高校生になって、野球を教える。小豆島高校でなくとも、次へつないでいけることが大事ではないか。

小豆島という地を考えるときに、同じメンバーで野球をやっていくと思う。逆に言うと人材が限られている中で、磨く対象が決まっていると考えると、小中高一貫して考えて、いつ、どこで、どんな教育をするのか、野球で言ったらいつ、どこで、どんなトレーニングをするのか。たとえば８歳から１２歳のゴールデンエースと呼ばれる時にどんな練習をするのか、中学生の時どうやって持久力をつけさせて、高校でどうやって筋力を伸ばすのか。その時々で伸びる要素が違うので、長期的に見てトレーニングして、教育活動できたらより良いものになるのではないかと考えている。

[塩田町長]

ありがとうございました。それでは教育委員の皆さんからご意見・ご質問をお願いする。

[後藤教育長]

内田さんと森川さんから子どもの宿題が多いという話を聞いたが、そうかもしれない。小豆島には塾が少ない。都会では学校の授業をフォローする形で塾が存在している。学校の先生方は授業を一番に考えており、定着を図るためにしているため、宿題量が多くなるのかと思われるので考えていかなければならない。７月に水泳の記録会があり、１０月に陸上の記録会があり、これは小豆郡全域で同じであるが、これに向けて練習している。地域の独自性を考慮すると、放課後に野山に行って遊ぶというのは難しい。その分、勉強が落着けないのは申し訳ないと思っている。各学校同じ時期に同じようなことをやっていることはご了解いただきたい。今日言われたことは見直していきたい。

森川さんが言われた、教員の時間だが、一週間に一回は早く帰ったらと校長会でも言った。週に一回は難しいが、月に一回は１８時には学校が真っ暗になる日を作りなさいと話をした。教員の先生は一生懸命しているが、家庭を振り返る時間がなく、リフレッシュできる時間を最低月一回は作りたいと考える。月中行事として、この日は早く帰ると明記してくださいというように、教員のリフレッシュが少しでもできるようにしていきたい。

内田さんが言われた自然体験は、公立の幼稚園保育園では難しいこともあるかと思うが、取り入れられるところは取り入れ、少しでも子どもたちがそういった体験をして、自然体験の中から学んでいけることを増やしていきたいと考えている。保育園、幼稚園の先生方も、そういった方向へ進んでいけるようにしているので、長い目で見ていただきたい。

[熊坂委員]
　学校教育に関してはその通りであるかと思う。自然との触れ合いという点では、私たちの周りの里山や海は荒れている。私は２０年間教育キャンプをやった経験がある。柴崎さん、岡田さんにはリーダー、ヘルパーとして協力いただいた。高校生が自然に触れ合う機会が少なく、小学生が自然に触れ遊ぶことが難しくなってきている。環境を作らなければならない。中山の千枚田のように自然のままで豊かな収穫ができている。周りの自然を大切にすることが重要かと思う。
　中山の農村歌舞伎について、矢田さんの長年の苦労をありがたく思う。私も５０年近く前県立の図書館の館長をやっていた恩師が、小豆島民俗芸能調査研究をしており、手伝いをした。小豆島の農村歌舞伎がどこの舞台でいつどういう芝居を上演したのかという記録を掘り起こして、写真を撮り調べた。どこの舞台もそのころすでに無くなっており、肥土山と中山だけになっていた。明治の終わりから、大正昭和の初め、昭和３０年ごろまで、島の歌舞伎は盛んに行われていた。急速に民俗芸能が消えたのはなぜか。芝居をする環境が変わっただけでなく、三味線と太夫さんがいなくなったことではないか。今はいるのか。

[矢田氏]
　その通りです。大変苦労している。中山、肥土山だけでなくどこの少なくなってきている。三味線が好きな人や民謡を歌っていた人に声をかけたり、今はビデオなどで練習してもらっている。

[岡田委員]
　内田さん、「しましまようちえん」は聞きなれなかったが、以前活動の様子をみた。海や川に行くようだが、具体的にどのような活動をしているのか、教えていただきたい。

[内田氏]
　今は３歳から５歳を対象に週に４日活動している。週に１日は３歳までの親子組といって、小さなお子さんと親子で一緒に来てもらい、肥土山の方から場所を借りてお菓子などを作っている。３歳から５歳のクラスは幼児組として、人数はいないが決まった子たちが来ている。月曜は肥土山で、火曜日は西村で水曜日は休み、木曜日は池田の城山、金曜日は星ヶ城に登ったりしている。９時半に集まり、朝の集まりで子どもたちがしたいことを聞いて、いつも大人は２人で３～５人の子供たちと活動している。

[岡田氏]
　矢田さんに質問ですが、私も三味線、大夫、振付師などの指導は後継のために必要。そういった影のところの人材が必要ではないかと考える。先ほどの回答から付け加えることがあればお聞きしたい。

[矢田氏]
　今は制限時間があるので、みなさんに言いたいのだが、現場に行って説明をしたいので、興味のある方は来ていただきたい。

[黒木委員]
　島の子どもたちは高校を卒業すると、ほとんどが島外の大学、専門学校へ進学しているが、その子どもたちが、この小豆島には素晴らしい自然環境、立派な歴史、伝統、企業があるということを、家庭、学校、地域、行政が一体となって教えていくということが大事であると思っている。企業にお願いしたいのは、都会に出て就職するよりも待遇がいいということを伝えていただければ、島の企業に就職しようかなという気持ちになるのではないかと考えるので、お願いしたい。

[岡本委員]
　「しましまようちえん」ですが、外に出て遊ぶのは大事なことと考える。小豆島は自然が多く、足を延ばせばすぐに遊ぶ場所がある。「しましまようちえん」を通じて家庭単位で自然に飛び込んでいく機会が増えればいいと思う。森川さんの宿題が多いという話も、実感している。先生の勤務時間だが、私も昔から７時８時を過ぎても残っているのは、先生にも家庭があるのにいかがなものかと考えていたので、早く帰る環境を作って、リフレッシュして子どもに向かえるのではないか。農村歌舞伎は見るのは一瞬であるが、裏を見ると大変時間がかかっているのを見たことがあり、地域の皆さんが一致団結していることが、島の良さではないか。そういった情報も情報発信して、ＰＲしていければよいのではないか。柴崎さん、岡田さんの話では、情報発信、特に中学生のリクルートに関しては、理系文系の選択もあり、そのころから必要ではないかと思うが、その都度伝えていくことで将来図が見えてくるのではないか。情報発信して需要と供給がマッチングするようにしていってほしい。

[塩田町長]
校長先生からご意見を。

[岩澤小豆島高等学校校長]
　野球部の方では島を挙げて応援していただき、ありがとうございました。岡田さんと柴崎さんの話では、高校としてもアナウンスしたいと考えている。ハローワークと連携して、島の中での説明会も、ホームページで掲載して、リンクさせるという形をとっている。高校２，３年生に対して説明会も計画しているので、ぜひ島に帰って来るようなシステムができたらなと考えている。

[小玉小豆島中学校校長]
　中学校も帰る時間は非常に遅く、町長にも言われたように、リフレッシュナイトということで月一回は１８時に帰ると、１７時５５分には蛍の光をながして意識づけていきたい。小豆島の自然の豊かさは素晴らしいと思うし、子どもたちが受け継いで小豆島のためにやっていってほしい。自分の生きる使命を子どもたちに持たせていけたら。子育てでは家庭が一番大事。子どもたちが親とつながって行くことで実感して成長していけたらと思う。杉吉先生の未来志向やボトムアップなど、自分で考えて行動するのが大切、自分で判断して行動して最後自分で責任を取らせるということで生徒と向き合っている。子どもたちの将来にかかわってくると考える。これからもやっていきたい。

[片山池田小学校校長]
　中山の農村歌舞伎には大変お世話になっている。私も２０年前に池田小学校にいたが、その当時歌舞伎に出るのは４，５年生であったが、今は２年生から出て、指導していただいている。地域を知るために教育しているが、もの・ことを調べるだけではなく、人にかかわり、その思いを知りなさいと教育している。農村歌舞伎であっても演じるだけでなく、続けていこうという思いを知るように教育している。自分たちの地域を誇りに思えるようになってもらいたい。

[羽座星城小学校校長]
　教員の勤務時間が長いということで、時間早く帰る日を決めた。ペーパーレスの話では、今年から校長便りを紙で出しているが、昨年度よりも紙の消費量が増えたように思う。ぜひ読んでいただきたいので紙でとは思うが、紙を減らすように検討していきたい。

[三浦安田小学校校長]
　英語はツールである、という割り切った考えに驚いた。キャリア教育の視点に立った夢と希望をはぐくむ教育というものをしているが、自分の将来、夢を持って生きられたらといっている。杉吉先生の時間は未来から流れているという考えは、未来の自分をイメージしなさい、そこから何ができるかを考えさせることは参考になった。

[川井苗羽小学校校長]
　わが校には音楽という特徴があるので、伝統を守りつつも今の子どもたち、親、地域の皆様のニーズを考えていきたい。うちの学校に来てよかったと思っていただけるように話していきたいと思う。

[慈氏草壁保育園園長]
　個人的な話だが、僧侶をやっているが、宗教も後継者がいない。柴崎さん、岡田さんのおっしゃるようにいろいろな情報が少ない、子どもたちや将来の目指す人の職に入ってこない。情報発信していくべきである。檀家も高齢者ばかり。若い世代が残ることでうまくいく。幼稚園の子どもたちには、日々島を愛するように、話している。小さいころからの刷り込みが必要だと考える。

[大岡内海保育所所長]
　幼児期の自然体験の話が出ている。幼稚園や保育園では、人数がいるので集団で行けるところは、整備されているところであるとか、限られている。整備されたところとそうでないところでは、危険予知能力が違ってきている。なので、ある意味なるべくそうでない場所に行けるようにしている。そのために、教育委員会の方からスクールバスを配車していただいて島内いたるところに、福田や池田、寒霞渓にも行った。情報発信することで、両親に「行ってきたよ、また連れて行ってね」という形で今度は、集団でなく個人で違った体験をしてもらう。そのような自然を子供たちに知らせていくということを、幼稚園、保育所としてはしている。内海保育所としては、歩く、ということで、往復２時間くらい

の場所であれば歩いて行くようにしている。また１歳児は歩き出したら園周辺を歩く、遠くなら５歳児が１歳児や２歳児の手を引いて、交流しながら歩いている。

[塩田町長]
　次回は、１月２０日１３時半からこの場所で小豆島町の教育大綱について話を行う。
　今日は７人の皆様ありがとうございました。